

# 月の砂漠に銀の雨

二人の騎士と異世界の神子



ハリファ・カハル

「男として生を受けたからには  
一度は天下に挑んでみせねば  
生まれた甲斐もなし！」

東の国、アル・ハダール帝国の皇帝。  
豪快で破天荒な性格だが、  
老獪な一面も  
持ち合わせている。



ウルド

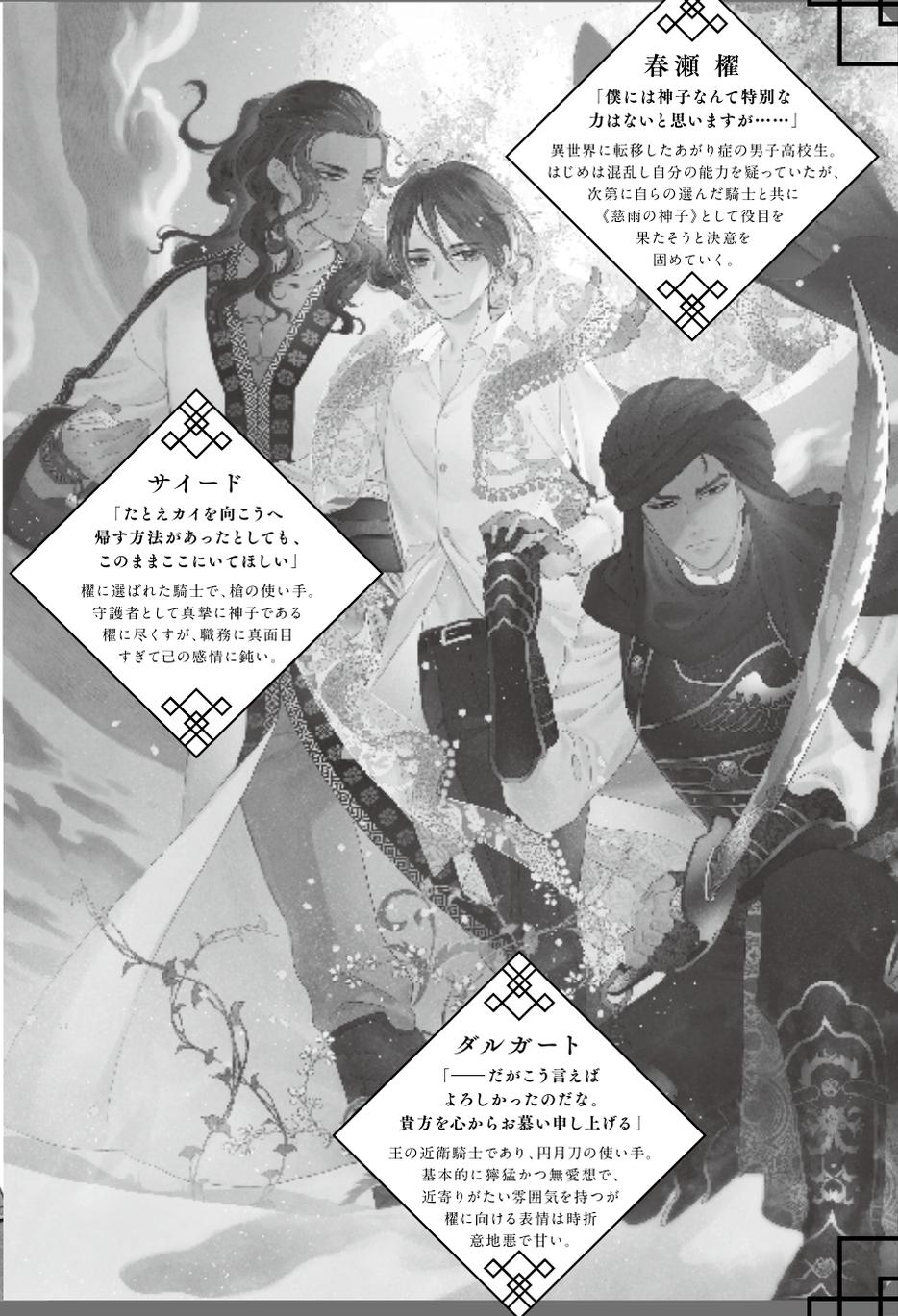
「お仕えできる光栄に  
感謝します、《慈雨の神子》よ」  
権に仕える近衛。  
権のことを心から慕っている。



マスダル

「ちょうどいい。  
先日の礼を返してやる……！」

南の国、エイレケの騎士。  
権に選ばれなかったことを  
恨んでいる。



春瀬 權

「僕には神子なんて特別な  
力はないと思いますが……」

異世界に転移したあがり症の男子高校生。  
はじめは混乱し自分の能力を疑っていたが、  
次第に自らの選んだ騎士と共に  
《慈雨の神子》として役目を  
果たそうと決意を  
固めていく。

サイド

「たとえカイを向こうへ  
帰す方法があったとしても、  
このままここにいてほしい」

権に選ばれた騎士で、槍の使い手。  
守護者として真摯に神子である  
権に尽くすが、職務に真面目  
すぎて己の感情に鈍い。

ダルガート

「——だがこう言えば  
よろしかったのだな。

貴方を心からお慕い申し上げる」

王の近衛騎士であり、円月刀の使い手。  
基本的に癡猛かつ無愛想で、  
近寄りたがる雰囲気を持つが  
権に向ける表情は時折  
意地悪で甘い。

目次

月の砂漠に銀の雨

7

番外編 近従ウルドの仕事

347

月の砂漠に銀の雨

「こ……ここ、どこ……？」

そう呟いたはずの声は掠れて上手く出てこなかった。

ざらつく白い石の床。高い半球形の天井や白い壁に描かれた、複雑に繋がり合う青い幾何学模様。まるで外国の宮殿や神殿のようだ。さつきまで自分がいた教室の黒板も教卓もなく、先生もクラスメイトもいない。

ここは一体どこなんだ？

石造りの大きな広間の、舞台のように高くなった場所から恐る恐る身を起こす。すると突然辺りを揺るがすような歓声が轟いた。跳び上がりそうになって声の方を見ると、下の方で大勢の鎧姿の男たちが僕を見上げて拳を振り上げ、聞いたことのない言葉で何かを叫んでいる。

その先頭には白い衣を纏った老人がこちらを見つめていた。

「えっ、な、何……っ!？」

何が起こっているのかわからず、驚きと恐ろしさに心臓がぎゅっと引き絞られる。

鎧姿の男たちの大きな身体と彫りの深い顔。聞いたことのない異国の言葉。見慣れぬ光景。ほ

んの数分前まで自分のクラスの教室にいたはずなのに、どうして？

硬い石の床に座り込んだままごくりと唾を飲み込む。

その時男たちの先頭に立つ髭の老人が手を上げた。一斉に兵士たちがひざまずき、辺りが静まり返る。けれど彼らが僕を見る目は酷く熱っぽいままだ。

訳がわからず縮こまって息を潜めていると、僕の元に髭の老人がやって来て何かを言った。

けれどやはりその言葉の意味はわからない。

「あ、あの、ここは」

何か言わなきゃと思うのに頭が混乱してそれ以上言葉が出ない。

すると老人の後ろから三人の男たちが現れた。彼らは揃って長いマントを翻し、一段高い僕の前に膝をつく。同時に下の兵士たちの視線がさらに緊張を増すのが肌でわかった。

彼らが何をしたいのかわからない。僕がここにいる理由もわからない。わからないことばかりでパニックになりかけた時、ひざまずいた三人が頭を上げた。

その三人の視線の強さに僕は息を呑む。

一番右にいたのは紺色のマントを纏った金髪の男だ。長い髪を後ろで束ねていて容姿は驚くほど整っている。しかし、彼の青い目は酷く剣呑な光を放って僕を見つめていた。

真ん中の男は深緑色の布を頭に巻き、同じく深緑色のマントを羽織っている。岩のようにごつごつとしたいかつい顔で、この中で一番体格がいい。彼は初めの人よりも強烈な、まるで獲物を見つけた肉食獣のような目つきで僕を見ていた。

慌てて視線を逸らして最後の一人に目を向け、——僕は思わず言葉を失った。

三人目の男は明るい色のマントに暗赤色の服を纏っている。肩まである少し癖のある黒髪に褐色の肌。意志の強そうな凛々しい眉と黒い切れ長の目に吸い込まれそうになる。美しさと精悍さが同居したようなとんでもない美貌に思わずぼかんと見蕩れていると、その人は目を細めて僕を見ながらほんの少しだけ口角を上げた。

恐怖と混乱の中で唯一向けられたその笑みに、どつと肩の力が抜ける。

一体、何がどうなっているんだ。どうして僕はここへ？

なんとかその答えを探そうと、僕はここで目覚めるまでの出来事を必死に思い出そうとした。

◇

「なんだ春瀬、お前もうちの班かよ」

夏休みが明けたばかりの今日、僕たちは高校生活最後の文化祭の班を決めていた。クラスでも特に目立つグループの加賀谷君にそう言われて少し怯む。それでも曖昧に微笑んでごまかそうとしたら、先生がやたらと陽気な声で横から言った。

「そう言うな。春瀬だって同じクラスの仲間だろー？ 人数もちょうどいいし、お前らんとこに入れてやれー」

空気を読んでくれない先生の言葉に思わず視線を逸らすと、隣の席の女子が机に出しっぱなしに

していた鏡に自分の顔が映っていた。癖のないまっすぐな黒髪とこれといって特徴のない目鼻立ち、あまり外に出ないせいで夏でも白い顔が真っ赤に染まっている。

僕は小さい頃から緊張したり、誰かにじつと見られたりするとすぐ顔が赤くなってしまふ。そんな顔を見られるのが嫌で、ついつい賑やかな人の輪から外れるように生きてきた。

この癖があるせいで上手く感情を表すこともできない。

高三にもなって恥ずかしいとは自分でも思う。両親から譲り受けた長所は何一つ見当たらないし、スポーツ万能で友達も多い兄とも似ていない。趣味も父親の本棚にずらりと並ぶ昔のマンガや小説を読むことという超インドア派だ。

でも、両親も兄も呆れながらもそんな僕を温かく見守ってくれている。家族仲も悪くなく勉強もそこそこ楽しいし、自分の人生にはそれなりに満足している。

けれど時々、一つでいいから僕にも何か特別な力があったらいいのにな、と思うことがある。顔がいいとか頭がいいとか、兄のように運動神経がもの凄くいいとか。

それが無理でもせめてこれさえなければなあ、と俯き、手のひらで真っ赤になった頬を隠したその時——突然、ぐらりと身体が傾いで眩しい光が視界いっぱいに溢れた。

同時に身体がどんどん薄く軽くなって、自分の中の何かがバラバラに分解されていくような感覚に襲われる。

「おい、春瀬！ どうした!?」

「ちよ……春瀬……っ!? おい、手え出せ！」

先生と加賀谷君が驚いた顔で駆け寄ろうとするのが見える。とっさに手を伸ばそうとしたけれど、その手は薄く透けて眩しい光の中に消えていった。そしてふと気がつくとき、僕は見知らぬ世界で大勢の人たちに囲まれていたのだ。

「……!!」

鎧姿の人たちが叫ぶ声にハッと我に返る。慌てて瞬きをしてもう一度さっきの人を見た。僕の前にひざまずく三人の中でただ一人、ほんのかすかだけ僕に微笑んでくれた人。

彼はまだ僕のことを見つめていた。もの凄いい美形からの視線にうろたえてしまう。

まずい、顔と耳が凄く熱い。間違いないいつものあれだ。よりによってこんなタイミングで……と焦っていると、三人の男たちは片膝をついたまま揃って右の手を差し出してきた。

え？ まさかこの中から一人を選べること!? ここがどこか、この人たちが誰かもわからないのに？

「そ、そんなの……!!」

そんなの無理に決まってる！ 思わず床に座り込んだまま後ずさる。けれど髭の老人も三人の男たちも、下にいる大勢の兵士たちも、皆食い入るように僕を見つめたままだ。その時、下にいる彼らが鎧の上にそれぞれ紺と深緑、そして暗い赤色のマントを羽織っているのに気がついた。この色

はもしかして……

そうだ、目の前にいる三人が身に着けている色と同じだ。きっとこの三人は、同じ色を纏う兵士たちの上に立つような人なんじゃないか。

そう気付いた時、下にいる兵士たちの一人が突然何かを叫んだ。すると他の男たちも拳を振り上げ、僕に向かって一斉に声をあげ始める。言葉がわからなくても、彼らが僕に「早く選べ」と迫っているのが痛いほど伝わってきた。

「ま、待って、そんなこと言われても……っ」

怖い。怖い。皆、叫びながら早く早く僕を急ぎ立てている。頭の中がぐちゃぐちゃだ。早く、とにかく誰かを選べばこの騒ぎは収まるだろうか。そう思い視線を戻すと、三人のうちの二人がギラギラと異様に熱の籠もった目で僕を見ているのに気がついて身が竦んだ。

「……ッ！」

この狂乱じみた熱気の中で、さっき僕に微笑んでくれた人だけが静かに僕を見ている。僕はすぐる思いで彼が差し出す手に飛びつき、額を押し付けた。そしてきつく身を強張らせる。

これが夢なら早く覚めてくれ……！ 教室には他にも大勢人がいたのになんで僕だけが！ 確かに、特別な人になれたら、なんて空想したこともあった。でも、まさかこんなことになるなんて！ すると突然逞しい腕が僕の身体に回されて、思わず息を呑んだ。

「っ、えっ!?」

そのまま軽々と持ち上げられて、その場にそっと立たされる。兵士たちの怒声のような声はいっ

の間にか収まっていたけれど、周りを見るのが怖くてどうしても目が開けられない。すると彼の手が僕の手をぎゅっと握った。

それに励まされるように恐る恐る目を開ける。すると彼はずっと上の方から僕を見下ろしていた。どこをとっても文句がない男らしい美貌のあまりの近さに、思わずどぎまぎしてしまう。まずい、きつとまた顔が真っ赤になっているだろう。

そんな僕にその人はまたかすかに口の端を上げると、突然僕を横ざまに抱き上げた。

「うえっ!？」

驚いて腕を突つばねたけれど彼の身体はびくともしない。不意にその人の唇がかすかに動いた。

「――」

聞こえた声に僕はまた息を呑む。言葉の意味はわからないけれど、深くて落ち着いた、凄くほつとするような声だった。

恐る恐る彼の腕の中に身体を預けると、暗赤色のマントをつけた兵士たちが一斉に雄叫びを上げて拳を振り上げた。その声を背に黒髪の人は髭の老人に一礼すると、僕を抱えたまま横の廊下へと歩き出す。

僕が彼を選んだことで何かが決まったのだろうか。僕はこれから一体どうなるんだろう。

「あの、お、下ろしてくれませんか……っ」

こわごわ声をかけてみたが、彼はわずかにこちらを見下ろしただけだった。凛と前を向き、歩く彼にそれ以上何か言う勇気が出ない。一体どこに連れて行かれるのだろうと不安になる。けれど僕

を抱えて歩く彼の穏やかな笑みがまだ心にほんのりと残っているようで、不思議とこの人の腕の中から逃げ出そうとは思わなかった。

ようやく彼が立ち止まったのは、長い廊下を進んだ先の大きな扉の前だった。

中に入ると、護衛らしき人を従え、大きなターバンを頭に巻いた壮年の男が部屋中央に座っていた。年は四十か五十頃だろうか、立派な髭を顎にたくわえていて、まるで一国の王のような貫禄と迫力に満ちている。

僕を抱えていた人は、僕をその男の向かいの長椅子に下ろそうとする。

「え、ちょ、待って……!」

突然知らない人の前に放り出されそうになって思わずその腕を掴んだ。それを見たターバンの男が大きな声で笑って手を振ると、彼は僕を座らせてから隣に腰を下ろしてくれた。けれどその口元に笑みはなく、端正な横顔は正面に座るターバンの男の方を向いたままで、なんだか急に心細くなる。そつと辺りの様子を窺うと、壁や窓や敷物は先程の建物と同じように幾重にも連なる幾何学模様で彩られていた。それにここにいる人たちの頭に巻かれた布や裾の長い服は、以前図書室の写真集で見たアラブや中東の世界を彷彿とさせる。そんな中で一人だけ高校のブレザーを着た自分が凄く場違いに思えて居心地が悪い。

その時、扉の聞く音がして白い髭の老人――先程兵士たちの前に立っていた人だ――が入ってきた。彼はターバンの男に一礼すると、透明な液体で満たされた杯を僕に差し出してくる。

なんだろう。飲めと言っているのかな。でも何が入っているのかもわからないのに正直怖い。

僕が杯を受け取るのを躊躇っている、その老人は僕をここへ連れてきた男に杯を手渡した。彼は僕の肩を引き寄せると、杯を僕の口元に押し当てて静かに僕を見つめる。なぜか彼の視線に逆らえなくて少しだけ口を開けると、とろりとした液体が喉を滑り落ちていった。

僕がその液体を完全に飲み込んだのを見届けて、白い服の老人は口を開いた。

「——それは《言の葉の秘薬》と呼ばれておる。どうか、わしの言葉がわかるかな」

「え……、えっ!？」

ただの音の連なりだった彼らの声我突然意味を成し、僕は慌てて頷く。

「わ、わかります」

「そうかそうか、それは重畳」

まるで物語の中の好々爺のように笑って彼は言った。

「まずは、よう参られた。界渡りの君。儂はこのダーヒル神殿領の神殿長ムスターと申す。そしてこちらは東のアル・ハダール国の皇帝、カハル陛下であらせられる」

やはり偉い人だったのかと硬直すると、神殿長に示された大きなターバンの男——カハル陛下はずいぶんと気さくな顔で笑った。

「いかにも、儂がハリファ・カハルだ。して、そなたの名は？」

「は、春瀬權です」

「ほう、界渡りの君は姓を持つか。カイ……聞き慣れぬ族名だ」

「あ、すみません。名前がカイで姓がハルセです」

「そうか。名がカイ、だな。あいわかった」

そう頷くと、カハル陛下は僕を見てまたニヤリと笑った。

「して、カイとやら。早速だが我がアル・ハダールの地に恵みの雨を降らせてもらおうか」

「あ、雨を降らせる……?」

突然言われた言葉に僕はポカンとしてしまう。すると神殿長が頷き、僕を見つめた。

「そなたは、この大陸に古より伝わる秘蹟にて呼び出された《慈雨の神子》なのじゃよ」

「は……?」

そこから説明された内容はまさにゲームやマンガの世界としか言いようのない話だった。

今僕が『呼び出された』このイシュマール大陸にはもともと雨季と乾季があったそうだ。でも三百年ほど前から雨がどんどん減ってきてあちこちで砂漠が増えている。そこで今は五十年ごとに一人、雨を降らせることができる神子をよその世界から呼び出している——そういうことらしい。信じられない思いで僕は彼らを見つめ返した。

「そ……それで僕がその、雨を降らせる神子だって……?」

「その通り」

白い髭の神殿長が頷いた。

「そんなバカな」

僕は確かにそういうファンタジーめいた話は好きだし、似たような設定の物語をいくつも読んだことがある。でもそんな超能力をこの僕が持っているわけがない。

「な、何かの間違いです。だって僕はそんな力は……」

慌てふためく僕を見て神殿長が笑った。

「まあまあ、突然のことで戸惑われただろう。今日のところはゆっくり休んでまた明日話をするでしょう。それでよろしいかな、陛下」

「構わぬ」

重々しく頷いてカハル陛下が席を立つ。すると皆が立ち上がって礼をとったけれど、僕は長椅子から腰を上げることがすらできなかった。

この世界で砂漠化が進んでいるなら確かに雨が降るかどうかは死活問題だ。でも僕が雨を？ そんなの無理に決まっている。血の気が引きかけた時、突然肩をガシッと掴まれて心臓が一瞬止まった。

見上げると、カハル陛下が豪快な笑みを浮かべていた。

「そう怯えずともよい、《慈雨の神子》よ！ とりあえずは我が忠臣サイドを選んだだけでも我らにとつては僥倖。そなたは男を見る目がある！」

そう言ってバンバンと勢いよく僕の背中を叩くと、カハル陛下は二人の護衛を連れて部屋を出て行ってしまった。途端に辺りに満ちていた緊張感と威圧感が薄れる。

ほっとしていると、少しばかり気遣わし気な表情をした神殿長が僕の顔を覗き込んだ。

「今日はもう休むといい、界渡り殿。じゃが、その前にもう一人だけ紹介させてもらおうかの」

そう言って神殿長が僕の隣を指し示す。

「そなたが先程《選定の儀式》において選んだ者は、アル・ハダールの騎士サイドという。これからはこの者が傍にしよう。さて、サイド殿、まずは界渡り殿を休ませてやるとよい」

その時、僕は初めてさっきの人の服の裾をずつと握りしめていたことに気がついた。

「す、すみません……っ！」

慌てて手を放すとサイドさんは、小さく微笑んで首を振った。その微笑みは大人が子どもに對して見せるような表面的なものだったかもしれない。けれどもういっばいいいっばいだった僕には、そんなわずかなものでも、彼が自分に向けてくれた優しさが泣きたくなるほど嬉しかった。

「さあ、部屋に案内させよう。界渡り殿」

神殿長に促されて立ち上がる。けれど急に緊張が切れたせいで僕の意識はそこで完全に途切れてしまった。

## 第一章 神子の役目

朝、目を覚ました時に最初に感じた違和感は匂いだった。

カラカラに乾いた空気に様々な香辛料が入り交じったような、馴染みのない異国の香り。

こわごわ周りを見ると上から垂れ下がる薄いベールに囲まれている。天蓋付きベッドというやつ

だ。どう考えても僕の部屋ではない。そう思った瞬間、昨日の出来事を思い出して真っ青になった。そうだ、教室にいたはずなのに、気がついたら僕は突然知らない場所にいたのだ。

確か雨を降らせる神子とかなんとか……あれは夢じゃなかったのか。

マンガや小説を読むのが唯一の趣味だから、異世界に飛ばされた主人公が活躍する話はたくさん知っている。でもそれはあくまで創作の世界だ。神子などと言われても全く身に覚えはないし、雨を降らせる方法なんてわかるわけがない。

息を詰めて辺りの様子を窺うと、天蓋から垂れ下がるベールの向こうに人がいる気配はなかった。覚悟を決めてそと薄掛けを剥ぐ。その時、自分が寝ている間に服を着替えさせられていることに気がついた。

普通のパジャマや部屋着と違って、上着が足までを覆っていてズボンがない。前にボタンのないワンピースのような服装だ。砂漠化が進んでいる国ではこういう通気性のいい寝巻きがちようどいいのだろうか。昨日は動揺していて気付かなかったが、確かにこの部屋も少し暑いような気がする。素足のままそとベッドから下りる。足音を忍ばせて部屋の片側にある窓を開けると、嗅ぎ慣れない匂いと熱気が一気に押し寄せてきた。そして見えた景色に言葉を失う。僕の目に飛び込んできたのはいくつもの白い石造りの建物と外壁、その向こうにどこまでも続く砂漠、そして今まで見たことがないくらいに広く青い空だった。

「……どう見ても日本じゃない、よな」

ありえない光景を前に、自分がとんでもないところに来てしまったのだと実感する。

窓から手を伸ばしてみると、じりじりと焼けつくような太陽の熱が手を襲い慌てて引つ込めた。

こんな見渡す限りの砂漠に雨を降らせるなんて、どう考えても無理に決まっている。

一気に血の気が引いて、僕は壁にすがるようにするずるとしゃがみ込んだ。

こんな土地ならそりゃあ水は貴重なものだろう。雨を降らせるためならなんだつてするに違いない。もしそれができなかつたら僕はどうなるんだ？ 昨日会ったカハル陛下という人は豪放磊落という言葉がぴったりのように見えたが、その分やる時は躊躇いなくやる性格のような感じがする。役立たずはいらないと言つてここから放り出されでもしたら……

そこまで考えていてもたつてもいられず、部屋の反対側にある大きな扉に駆け寄る。そして力任せに押し開けた。すると扉のすぐ横に人影が立っていて、思わず出そうになった悲鳴を呑み込む。

「——っ!?!」

しかし時すでに遅く、男の視線は僕を捉えていた。

それは黒革の鎧とマントを纏った、もの凄く大きくて逞しい男だった。頭には目深に布を被つていて、発する気配は瘴猛そのものだ。視界の端からこちらを見下ろす目は恐ろしく冷ややかに見える。怖い。怖いのになぜか目が離せない。その場に立ち竦むと、男の黒く冷たい目がわずかに細められた。

ほんの少しの変化だったが、一気に呼吸が戻ってくる。とつさに扉を閉めて震える息をなんとか吐き出した。

今の人はなんなのだろう。見張り？ 僕が逃げ出さないように見張っているのか？

きつとそうだ。あの人たちは何がなんでも僕に《慈雨の神子》とかいう役目を果たさせるつもりなんだ。急いで窓のところに駆け戻って下を覗いても、とても飛び降りて逃げられるような高さではない。

どうしよう、これじゃ逃げられない。

でも逃げるつてどこに？ 知り合いなんて一人もいないし、ここがどこかもわからないのに。

そう思った途端、目の前が真っ暗になる。

「な……なんで……」

なんでこんなことになってしまったのだろう。

昨日、神殿長だという髭の老人は確か、僕を「雨を降らせるために召喚した」と言っていた。

そんなのめちゃくちゃだ。一方的に人を呼び出して、それを謝りもしないで「早速雨を降らせてみせる」だなんてあまりにも勝手すぎる。

「……っ、ふざけるな……っ！」

今までの恐怖の反動か、もの凄く腹が立ってきて思わず叫んだその時、扉の外から物音がした。

誰か来た。とっさに天蓋のベールを跳ね上げ、寝台に逃げ込む。そしてヘッドボードに背中を押し付けて膝をきつく抱え、息を殺してベールの外を見つめた。扉がゆっくりと開き、誰かが室内に入ってくる。

「お目覚めでございましょうか、神子様」

ベール越しに誰かがこちらを見ている。僕は答えず、膝を抱えた腕に力をこめてじっとその人影

を凝視した。

「神子様」

呼びかけてくる声は若い男のもので、扉の前にいた男とは違う人物のようだ。ベール越しに白い服が見える。その声を聞きながら僕は唇を噛みしめた。

もしかしたら彼を突き飛ばしてこの部屋から逃げ出すことはできるかもしれない。でも、その後？

この世界のことをほとんどわかっていない自分がここを出て、生きていくことなんてできるだろうか。

そう思うと怖くて震えそうになる。けれどまだ腹の底でぐらぐらと煮えている怒りが収まらない。僕が黙りこくつていると、その人も諦めたのか、しばらくすると深く礼をして部屋から出て行った。僕は強張った身体から力を抜くと、抱えた膝に顔を埋めた。

「……これからどうしよう……」

起きたばかりのはずが、一気に疲れが襲ってくる。これからのことを考えると目の奥が熱くなってきた、ぎゅつと目蓋を閉じた。

しばらくして、またドアが開く音がした。さっきの男の他に二人、部屋に入ってくる。そのうちの片方が寝台のベールの前で深々と頭を下げた。

初めてお目に掛かります。私はアル・ハダール帝国宰相補のアドリーと申す者。恩寵に恵まれし

神子よ、我らはけっして貴方に害をなす者ではありません。どうか寝台の外へお出ましを」

淡々として冷静な話し方は、相手の信頼を得るのに本来充分なものだろう。けれど、彼の声はこの僕の恐怖や怒り、苛立ちや不安を和らげるほどの力はなかった。

僕が黙ったまましていると、アドリーと名乗った彼は隣に立つもう一人を指して言った。

「神子よ。聞けば湯浴みも食事もまだだとか。ここに昨日貴方がお選びになり、貴方をこの部屋にお連れした者がおります。どうかもう一度、彼に身を預けていただきたく」

そう言われて昨日僕を支えてくれた力強い腕をぼんやりと思い出す。そして初めて僕と目が合った時に彼が浮かべたかすかな笑みも。あの人は確か……

昨日聞いたはずの名前を思い出そうとした時、人影が近づいてきた。思わず膝を抱える腕に力が籠もる。その影は寝台の前で立ち止まって言った。

「アル・ハダール第一の槍、サイドという。神子よ、どうかそこから出てきてはくれないだろうか？」

その声はやはりどこか温かく感じられた。

昨日、兵士たちが口々に知らない言葉を叫び、他の二人の騎士が自分を選べど血走った目で睨んでいた間、この人だけはかすかな笑みを僕に向けてくれた。単に僕が少しでも安心したくて、彼をいい人だと思いついてしまっているだけかもしれない。それでも穏やかで落ち着いてその声は、ささくれだった僕の心にじんわりと温かく染み込んだ。

どのみち、ずっとこのままにいるわけにはいかない。そう思っただけで恐る恐る天蓋から下がるベール

に近づく。でもどうしても現実に向かう勇気が出ない。ベールを握ったまま固まった僕に、再びサイドさんが言った。

「ここを開けてくれ、神子よ」

そう言ってサイドさんが手を差し出すのが見える。けれど自分からはベールを開けてはこない。それは彼が僕の意志を尊重してくれている証のように思えた。僕は彼に答えるように小さく息を吸い、口を開いた。

「……カイです。僕の名前は、懼といいます」

するとサイドさんがかすかに笑ったような気配がした。

「そうか。ではカイ殿、御手を」

震えそうになる息をゆっくり吐き出し、重なり合うベールを掻き分ける。そして自分よりはるかに高いところにある彼の顔を見上げた。

「触れてもいいだろうか？」

サイドさんに聞かれて慌てて頷く。するとまたしても女の子のように横ざまに抱きかかえられてしまった。

「ちょ……っ、あの、自分で歩けます！」

「わかっている」

そう言っておきながらサイドさんは僕を下ろす気配もなく、さっさと部屋の片側へと歩き出す。

どこへ連れて行かれるのだろうか？ またカハル陛下たちと会うことになるのだろうか。そう思ったけれどどうやら違うようだ。

今まで気がつかなかったが、僕のいた部屋の奥には小さな部屋があった。サイドさんに抱えられたまま中に入ると、その小部屋のさらに奥に分厚い幕が掛けられている。最初に部屋に来た白い服の男がそれを開けると、湿気の籠もった暖かい空気がぶわりと押し寄せてきた。

もしかして風呂？ 砂漠の真ん中で？

「蒸し風呂だ」

思わずサイドさんを見上げると、そう言われた。

薄暗いその部屋の中心には熱い湯気がもうもうと立ち上る大きな壺があり、それを照らすようにいくつかの明かりが置かれている。周囲の壁には青と白の幾何学模様を描かれ、柔らかな布を幾重にも敷いたタイル貼りのベンチがあった。唐突に連れてこられた空間に戸惑うが、サイドさんは当たり前のように僕を床に下ろす。

すると突然誰かに袖を引かれた。驚いて振り向くと白い服の男が僕の服の裾を持ち、脱がそうとしている。

「や、やめてください……！」

とつさに裾を振り払うと、彼は困ったようにサイドさんを見上げた。するとサイドさんは僕をなだめるように頷いて言った。

「神子殿、彼は貴方の近従だ。あらゆる身の回りの世話をする」

「昨日は何も説明ができなかったからな。まずは湯浴みと食事を……と思ったのだが。何をすることも近従は必要だ。あまり構えず、彼に委ねるといい」

「ウルドと申します。お仕えできる光栄に感謝します、《慈雨の神子》よ」

そう言って白い服の男——ウルドさんは床に両膝をついて僕に向かって深々と頭を下げた。明らかに年上で優しいお兄さんといった雰囲気彼のあまりにもへりくだった仕草がどうにも落ち着かない。そう思いながらも反論することもできないまま立ち竦んでいると、サイドさんが僕の戸惑いを察したように言った。

「昨日は何も説明ができなかったからな。まずは湯浴みと食事を……と思ったのだが。何をすることも近従は必要だ。あまり構えず、彼に委ねるといい」

そう言われても見えず知らずの人に服を脱がされるのはさすがに抵抗がある。なんとと言って断ろうか迷っていると、耳にサイドさんの声が飛び込んできた。

「ウルド、彼の湯浴み着を」

そう言ってサイドさんは自分の腰帯を解き、上着とブーツを脱いで袖をまくり上げた。それからウルドさんから白い薄手の布を受け取ると、僕に向かって首を傾げた。

「神子殿、では私に身を預けてくれるか？」

代わりにサイドさんが手伝ってくれようとしているのか。ウルドさんがかなり驚いた顔をしたから本当ならありえないことなだろう。

とつさにどうしていいかわからず動けないままでいると、サイドさんは子供にするように僕の腕の上に挙げて夜着を引き抜いてから、薄い布を広げて僕の肩に掛けた。それから僕に羽織らせた布の腰辺りで細い紐を緩く結ぶ。着せられてみると湯浴み着というのは脇と前が開いた長めのベス

トのような形をしていた。

あまりにあつという間で恥ずかしがる暇もない。慌てて振り返ると、また彼は僕を軽々と抱えて傍のベンチに座らせた。

「え、いや、あの……っ」

「ウルド」

呼ばれたウルドさんが手桶の湯で絞った布をサイドさんに渡す。それを受け取ると、彼もベンチに腰を下ろして僕の背中や腕を擦り始めた。

「あの……！」

とっさに逃げようとしても、ひと回りもふた回りも大きいサイドさんの腕に捕まえられていてそれもできない。それどころかあの切れ長な黒い目で見られて固まってしまった。

「どうやら人に仕えられることに慣れていないようだな」

「あ……あの、元々僕はただの高校生……ええと、ただの平民なので」

指の間まで丁寧に拭われながらそう聞かれて、僕は真っ赤になっっているに違いない顔を隠した。

しかしサイドさんは気にした風もなく僕の身体を拭いていく。やがて、彼が立ち上がって僕の後ろに回った。その手が、僕の薄い湯浴み着の中に入ってきて腕の上の方や肩口を擦り始める。

これ、まさか全身拭くつもり？

緊張して顔は熱いし、心臓はドキドキしてくるし、部屋に籠もった蒸気のせいもあってか、頭がぼーっとしてくる。

ちよ、ちよつと、暑い……かも……？ こっちではこれが普通なのかな……

だんだん意識が朦朧としてきて、とうとう後ろのサイドさんに一瞬身体がぶつかかった。慌てて離れるが、サイドさんは全然気にしていないようで黙々と僕の身体を拭っていく。

「お水でございます」

ウルドさんに器を口元に当てられ、されるがままに水を飲む。喉を滑り落ちていく水が冷たくて気持ちがいい。その時、サイドさんに脇の下を拭われて思わず「ひゃっ！」と声が出てしまった。

「サ、サイド、さん、あの」

「サイドで構わない」

「え、いや、でも、あの」

淡々とした言葉に戸惑っていると、今度は胸元から手が入ってきた。首筋や胸やその下を擦られて、それ以上喋ることができなくなる。

「ん、……っ」

ど、どうしよう。手、離してほしいんだけど……！

少し目の粗い布で脇腹や腹を拭うサイドさんの手が徐々に上がって、ついに胸の先端に当たる。「っ、ひゅ」

変な声が出てしまった。恥ずかしさに思わず口を押さえても、なぜか二人ともまったく気にしていないようだ。どうか気にしなすぎてそのまま手を止めずにあちこち拭いたり擦ったりしてするのが本当にまずい。

「あ、あの」

もうそこでやめてほしいと口を開こうとした時、また胸を擦られて背筋がぞくと震えた。え、ほ、ほんと、ちょ、まって。どうしよう、身体を拭いてもらっているだけなのに、どんどん変な気分になってくる。なんで、身体がおかしい……！

部屋に立ち込めた蒸気で体温がどんどん上がって、全身にうつすらと汗や水滴が纏わりつく。それを拭きとろうとするサイドさんの手が行き来しては胸の間を撫でるように下りてくる。恥ずかしさに顔をそむけると、その首筋まで拭われて逃げ場がない。指先に巻いた布で耳の孔やひだをなぞられ、耳の後ろを擦られると、ぞくぞくと奇妙な感覚が腹の辺りから這い上がってくる。そのぞわぞわした感覚に再び声が漏れそうになった時、また口に器を当てがわれた。水ではないところりとした甘くて冷たいものが流れ込んでくる。

なんだろう……蜂蜜でも溶かされているのかな……おいしい……

籠もる蒸気に、時折与えられる甘い水、それにさつきからずくと下の方から這い上がってくるよくわからない感覚のせいで頭が上手く回らない。

不意にサイドさんの手が内腿に入ってきて、ぴくっと身体が跳ねた。

「う……、は……あ……っ」

腹や顔が熱くてたまらない……身体に力が入らず、再びサイドさんにもたれてしまう。

「どうした、熱いのか？」

すると耳元でサイドさんの声がして、また背筋が甘く疼いた。

「ウルド、少しハマームの温度を下げる」

サイドさんはそう言って、腿の内側を撫でるように擦った。

どうしよう、きもちいい。危うく声が出そうになった瞬間その手が離れる。今度は膝の方を拭かれて、心底ほっとした。ヤ……ヤバかった……。すっかり反応してしまっている下半身をなんとか隠したくて前屈みになる。

「神子様、どうかなさいましたか？」

僕の動きに気がついたのか、ウルドさんらしき声が聞こえてくるけど返事なんてできない。ただ身体を拭いてもらっているだけなのに勃ってしまうなんて、さすがに恥ずかしすぎる。

けれど、そんな僕を押さえるようにサイドさんが後ろから僕を抱く腕に力をこめた。背中当たる彼の逞しい筋肉の感触や体温がますます強く伝わって、身体がどんどん熱く火照っていく。するとサイドさんの手がまた僕の内腿の際どいところを掠めた。

「っ、あ、まって、あ……っ！」

どうしよう。我慢できずに涙が滲んできそうになる。

するとようやく僕の惨状に気付いたらしいサイドさんが驚いたように「すまない」と言った。

え、すまないって……？ ぼんやりとした頭で振り返ろうとすると、突然サイドさんに身体を持ち上げられた。

「っ!?」

そればかりか布越しではなく、直接僕のアレを握られてしまう。

「え……っ!? ちょ、だめ……っ、手を、離して……!」

「気にするな。男ならよくあることだ。神子よ、力を抜いてくれ」

「で、でも……っ!」

押し返そうとしても、サイドさんの力が強くてビクともしない。抱き竦められたまま、完全に勃起してしまったモノをサイドさんの手が抜く。

え、嘘、も、もしかしてこの世界ではこういうのって普通なの!? ぬ、又く手伝い!?

「あ、あ、ひう……っ!」

指の腹で先端を擦られたり、カリの下を優しく撫でられたりすると喘ぎ声が止まらない。ところどころ硬い肉刺のあるサイドさんの大きな手のひらにすっぽりくるまれて根元から先までぬるぬる抜かれて、我慢できずに馬鹿みたいな声が口から漏れてしまう。

どうしよう、きもちいい、人に触られるのって、こんなにきもちいいんだ……

それでも声を押し殺そうと必死に口を手で押さえると、ウルドさんがそつとこちらに身を屈めた。そして何かとろしたものをサイドさんが触れている場所に垂らされる。

「あ、い、いやだ、で、でる、んっ、でちゃう……っ!」

生まれて初めて他人の手で抜かれ、味わう快感はあまりに凄くて、結局そのまま僕はサイドさんの手の中に思いつ切り射精してしまった。

「……ッ、や、う、~~~~っ」

とぶとぶと白濁を溢れさせるそこに触れたまま、サイドさんが僕を見ている。

ああ、どうしようどうしよう、会ったばかりの人の腕にしがみついていつってしまったなんて信じられない。  
にわかに頭が冷えて、僕はあわててサイドさんに謝った。

「……っ、す、すみません……っ!」

恥ずかしすぎて本気で涙が出てきた。物心ついた頃から泣いた覚えなんてほとんどないのに、こっちに来てからやたら涙腺が緩い気がする。いくら異常事態とはいえ情けない。慌てて目を擦ると、サイドさんが慰めるように肩を撫でてくれた。

「近従はあらゆる世話をするのが仕事だ。恥ずかしがらなくていい」

あらゆる世話ってこんなことまで……? それにサイドさんは近従じゃないよね?

乱れた息を必死に整えようとしていると、ウルドさんが手桶に汲んだ水を、僕の身体に掛けてくれた。

室内の蒸気と与えられた快感で火照った身体に、その水は凄く気持ちよかった。そのままサイドさんに髪や身体を拭くために触れられるたびゾクゾクした感覚が戻ってきて、僕はまた熱くなってしまう顔を必死に隠した。

それから二人に服を着せてもらい、再びサイドさんに抱えられて寝室の隣の部屋へと連れてこられた。どうやらここは居間のような場所らしく、床には分厚いラグが敷かれ色とりどりのクッションが並べられている。その中の一つにぐったりともたれて、僕はようやく息をついた。

それと同時に、先程アドリーと名乗った人が部屋に入ってきた。

「湯浴みはお済みになりましたか」

彼はサイドさんより少し若いように見える。頭には彼らの国——アル・ハダールの色らしい暗赤色の布をきちんと巻いていて、着ている上着も細身のズボンにも一分の乱れもない。いかにも文官らしい几帳面そうな人だ。けれど僕の正面に腰を下ろした彼の顔は妙に上の空で、どこかそわそわしているように見える。

不思議に思っって首を傾げると、サイドさんも彼の様子の違いに気付いたようだ。

「どうした、アドリー」

「ああ……いえ、それより貴兄も濡れておられるようだ。先にどうぞ着替えを」

そう言っって手を叩くとどこからかウルドさんと同じ格好をした人がやって来て、サイドさんに服を手渡した。そして居住まいを正して僕に言う。

「失礼、神子よ。改めてアル・ハダール宰相補佐のアドリーと申します。お見知りおきを」

「カイです。あの、僕には神子なんて特別な力はないと思いますが……。お世話になります、アドリーさん」

「どうかアドリーとお呼びください」

硬い口調で訂正されてドキリとする。やはり、年上の人にあまりに丁寧な態度を取られると落ち着かない。けれど僕が何かを言う前に、彼は続けて話し始めた。

「……ご自分の力に酷く懐疑的なのですが、神子でなければ召喚に応じてこちらへ来ることはあ

りえませぬ。貴方が慈雨の御業をお持ちであることは間違いのないこと。どうかもっと自信をお持ちになり、そのお力を我らにお与えくださいますようお願い申し上げます」

言葉は丁寧だし、へりくだった言葉のはずなのに一方的に滔々と言われると、少し嫌な気分になる。するとサイドさんが「アドリー」と彼を遮った。

その声にアドリーがぴたりと話すのをやめる。まるで僕の気持ちを察してくれたようで嬉しさに振り向くと、ちょうどサイドさんは濡れて身体に張り付いたシャツを脱いだところだった。

薄々気付いてはいたけれど、美術館の彫刻か外国の映画スターのような見事な身体につい目が釘付けになってしまう。厚い胸筋ががっしりとした肩。くつきりと割れた腹筋や厚みのある胴周りが褐色の肌と相まって凄い迫力だ。これじゃ僕が抵抗したってビクともしないはずだ。昨日だっさっきだっさ……と思っったところでカッと顔が熱くなった。

「どうかしたか？」

サイドさんの声がして彼を見すぎていたことに気がつき、慌てて顔を前に戻す。

「な、なんでもない、です」

間違はなく今僕の顔は真っ赤だろう。ああ、もうこの癖は本当になんとかならないのかな。

なんとか視線をアドリーに戻すと、先程のサイドさんの言葉が効いたのか、彼は居住まいを直し、僕に向かって頭を下げた。

「……失礼しました。確かに貴方にしてみれば突然のことで色々と思うところもおありでしょう。ですが神子の力は貴方にしかないもの。どうか我々のために雨の恵みをもたらしていただきたい」

そう言われても、雨を降らせる方法など知らないのに簡単には領けない。そもそも自分にそんな能力があるのかもわかっていないのだ。

領くことも断ることもできないままでいると、着替え終わったサイドさんが僕たち二人の間に割って入った。

「アドリー、まずは食事だ。神子殿は昨日から何も食べていない」

「ああ、そうでした。重ね重ね失礼を」

アドリーが手を挙げると、白い服の人たちがいくつもの大皿や茶器を運んできて敷物の上に並べ始めた。皿の上には色とりどりの料理や果物が置かれ、香ばしく焼かれた肉の香りと香辛料らしい独特な匂いが入り交じっている。

サイドさんは気を遣ってくれたのだろうが、正直食欲なんてまるでなかった。

アドリーは胡坐をかいた膝の上に手のひらを上に向けて置き、目を閉じて何かを呟いている。

「食事の前に唱える聖句です」

いつの間にか隣にいたウルドさんが教えてくれた。サイドさんもアドリーと同じように「イル・マーク・アバール」と唱え、肉と野菜が刺さった串を手取る。それをぼんやりと見ていると、隣から食べ物載せた皿を差し出された。

「ええと……ありがとうございます、ウルドさん」

慌ててお礼を言うと、ウルドさんはもの凄く困った顔をして頭を下げた。その様子を見たサイドさんは、僕に向かって少し厳しい顔で首を振った。

「神子よ、人はおのれの分を超えてはいけない。彼のことはただウルド、と」

サイドさんの言葉に、ウルドはほっとしたように微笑んだ。その表情に、僕が間違ったことをしても、近従という立場であるウルドにはそれを指摘できないということに気がついた。

この世界の身分制度によるものなのだろう。

「……ありがとう、ウルド」

言い直すと、ウルドはまた微笑んで頭を下げる。けれどやっぱり年上の人を呼び捨てにしてあれこれさせるのにも落ち着かず、僕は手元に視線を落とした。

皿にはウルドがよそってくれた料理が綺麗に盛りつけられている。肉と野菜の串焼き、クレープに似た生地で巻いたひき肉、茶色のクリームのようなものが塗られたパンにレモンのような果物の輪切りを載せた炒め物。確かに日本とは違うスパイスの匂いがするけれど、食材自体はどれも僕の世界とほとんど一緒のようだ。とはいえ相変わらず食欲は湧いてこない。

仕方なくそのまま皿を膝に置くと、すでに食べ終わってお茶を注がせていたアドリーと目が合った。

「先程は話を急いでしまい失礼いたしました。雨の恵みをもたらす方法について……それはとりあえず置いておいて問題ありません。それよりまずこの大陸の状況をお話しましょう」

え、雨を降らせる方法って一番重要なんじゃないの？ というか僕は自分が神子だと納得したわけじゃない。でも今の僕は、あまりにもこの世界のことを知らないし、どうするにせよ情報はきつと必要だ。そこまで考えて、僕はサイドさんを見る。

サイドさんは僕の視線に気付くと励ますように頷いてくれた。彼のまっすぐで真摯な眼差しを見ると不思議と肩の力が抜けて、きつとなんとかなるんじゃないかという気になってくる。僕はアドリーに向き直ると「お願いします」と頭を下げた。

アドリーの話では、このイシュマールという大陸には現在三つの大国があるらしい。

東のアル・ハダール。

西のイスタリア。

そして南のエイレケ。

その三つの国に囲まれた中央にあるのがこのダーヒル神殿領だそうだ。神殿領は三国を含む大陸の国々の中で完全中立の立場をとる、大陸全土で信仰されているアルダ教の総本山だという。アドリーは付け加えるように続けた。

「昨日、儀式の間にて貴方が会われた三人の男たちは皆、三つの国を代表して集まった《選定の騎士》にございます。貴方が選ばれたサイド殿はアル・ハダールの騎士。つまり貴方を守護する権利を我らアル・ハダールが得たというわけです」

そう言つてアドリーが僕を見た。

「我々大陸の者にとって雨を降らせる神子は喉から手が出るほど欲しい存在。それゆえ奪い合いにならぬよう、神子自らに守護者を選ばせるのです」

「選ばせるって……」

それが昨日、僕がここに来た時に三人の騎士たちが手を差し出していたアレだったのか。でも選ぶといつてもあんな、なんの説明もなくいきなり誰か一人に決めろというのはあまりにも無茶が過ぎるのでは？ すると僕の疑問に気付いたのかアドリーが言った。

「事前に情報を与えず選ばせるのは互いの公平を期すためです。そうなれば神子がおのれの感覚で選ぶことになり、そのことに対して他の二国が文句をつけるのは不可能となりますゆえ」

「な、なるほど」

だから他の二人の騎士たちはあんな鬼気迫る目で僕を見ていたのか。完全に逆効果だったけど。「そして貴方はこのサイド殿を選ばれた。彼は実に頼りになる男です。きつと貴方をよく助け、守り抜くでしょう。貴方には男を見る目がある」

そう言つてアドリーはこくりと頷いた。確か同じことを昨日カハル陛下にも言われた気がする。しかし見る目があると云つても、僕がサイドさんを選んだ理由は彼だけが穏やかで優しそうに見えたからだ。何か深い考えや神の啓示のようなものがあつたわけではない。

……その選択が間違つていたとは今のところ思わないけれど。

そう思いながら隣を見るとサイドさんはこつちを見て少しだけ微笑んだ。うう……だめだ、また顔が熱くなりそうだ。僕は慌ててアドリーへと視線を戻して、疑問を口にした。

「あの、この神殿領は完全中立の立場なんですよ？ 全部の国が信仰しているような宗教の総本山なら、神子はここで保護するのが一番公平じゃないんですか？」

するとそれに答えてくれたのはサイドさんだった。

「ここには神子を守るための兵がないのだ」

「え？」

思わぬ答えに目を瞬かせる。すると後を引き継ぐようにアドリーが言った。

「神殿は武力を持ちませぬ。万が一どこかの国が神子を奪おうと神殿を襲っても、神子を守る者がおらぬのです」

その言葉にハツと顔を上げる。

「じゃあ僕はこれからここで暮らすんじゃないんですか？」

「貴方にはここで最初の儀式を終えた後、我々と共にアル・ハダールに来ていただくことになります」

「アル・ハダールっていうと、ええと、東の国でしたっけ」

するとサイードさんが僕を見て答えた。

「そうだ。ここからは帝都イスマーンまで馬で二十日ほど掛かる」

「神子にはまず《カルブの儀式》を行っていただき、そこで最初の恵みを与えていただきます。それから我々が貴方をお守りしてアル・ハダールに戻る予定にございます」

「さ、最初の恵みって……」

それって、その《カルブの儀式》で雨を降らせろという意味だよね。ただの高校生だった僕にできるわけがない。それとも、あんなに自信たっぷりアドリーが言っていたのだから、『神子』がその儀式さえすれば雨が降るのだろうか。

僕はぎゅつと服を握って唇を噛む。やってみなければ結果はわからない。でももしできなかった

ら？ カハル陛下の視線の強さや、儀式の間で口々に何かを叫んでいた大勢の兵士たちの姿、僕をギラギラした目で見ていた他の二国の騎士たちが脳裏に浮かんでくる。

マンガや小説で異世界に行った主人公たちは皆、努力とチート能力でバンバン世界を救っていた。もしかしたら僕もそんなことができるのだろうか。もっと楽天的で自分に自信があればこの状況を楽しむくらいでいられたんだろうか。

思わずため息を漏らすと、向かいに座ったアドリーが首を横に振った。

「神子よ。先程も申しましたが、雨の恵みをもたらす方法について悩む必要はありません。恵みを与える力を持つのは確かに貴方だが、雨を降らせるきっかけを作るのは別の者なのです。神子たる貴方は、ただそこにおられるだけでいい」

「え？」

それってどういうこと？ 僕が何かをするというよりは、誰かが僕を使って何かをする、というように聞こえて首を傾げる。

すると淡々と話していたアドリーが不意に目を輝かせて頷いた。

「貴方は間違いないイシュマルに恵みをもたらす《慈雨の神子》だ。なぜなら恵みの前兆はすでにこの地に表れているのだから」

「本当か？」

サイードさんが眉を上げてアドリーを見る。

「いかにも。貴兄らがハマームで身体を清めている時に。それで少し席を外しておりました」

なるほど。さつきアドリーが部屋に入ってきた時なんかそわそわしていたのはそのせいだったのか。けれどアドリーとは対照的にサイドさんは何か考え込むような顔になってしまった。

ええと、ハマームってさつきの蒸し風呂のことだよな。あそこにいる時に恵みの前兆……つまり雨雲でも出たってことかな。でもあそこで何かしたっけ？

そこまで考えてカッと火がついたように顔が熱くなった。……これ以上考えるのはとりあえずやめておこう。

お茶を飲むふりをして真つ赤になった顔をごまかしていたら、サイドさんの視線がふと僕の手元に落ちた。

「口に合わないか？」

「え？ あ、いえ……」

しまった。さつきから全然食べていないのがついにバレてしまった。

正直、肉や揚げ物ばかりでまったく食欲が湧かない。僕は曖昧に言葉を濁して目の前の皿を見る。だつてうちの普段の朝ごはんは、せいぜいパンかご飯に玉子とソーセージを足すくらいだった。

父さんと僕がご飯派で、母さんと兄貴がパン派。僕と兄貴が子どものころは朝ごはんがパンかご飯かでよくケンカになっていたらしい。だから母さんがいつも一日置きに交代でパンとご飯にしてくれて……そうだ、玉子も半熟か硬めかってまた言い合いになって……そこまで思い出して目頭が熱くなりそうなのを必死にこらえる。

……だめだ。とても今は食べられそうにない。

「今はちよつとお腹が空いてなくて」

首を振って皿を置くと、サイドさんだけでなくアドリーまでが眉間に皺を寄せているのに気がついた。

確かに神子が雨を降らせる前に過労や栄養失調で倒れたりしたら元も子もないだろう。

申し訳ないなと思うと同時に、胃の辺りがずしんと重くなる。

そうだ、この人たちは別に僕の心配をしているわけではない。砂漠に雨を降らせる大事な神子が倒れたら困るから、あれこれ気を遣ってくれているだけだ。

そんな考えが浮かんで、胃の辺りがムカムカして気持ち悪くなる。

それを振り払うように僕は勢いよく顔を上げた。

「あ、あの……っ！」

「どうされました、神子よ」

「僕が呼ばれた理由はわかりました。正直、そんなことができるとは全然思えないんですけど」

今まで僕は年上のよく知らない人相手にこんな風に自分から何かを言ったことなんて一度もない。それでも緊張と不安と訳のわからない焦りのようなものに突き動かされて僕は言った。

「だけど、もし僕が本当に神子で、無事雨を降らせることができたとして」

「ごくり、と唾を飲み込んで言う。」

「僕はいつ元の世界に帰してもらえますか？」

僕の言葉にしん、と部屋が静まり返る。その時落ちた沈黙ほど重たくて痛いものはなかった。そ

れだけで答えがわかってしまう。

「……つぶ、……つぶ」

ああほんとに、なんでこんな。俯いた顔に血が上って目の奥がたまらなく熱くなる。

「神子よ……！」

「神子様！」

アドリーとウルドの声がしたけれどとても返事なんてできなかった。

この世界に連れてこられてずっともしかしたらと心のどこかに引っかかっていた。僕が本当に神子だったとしても、果たして僕はちゃんと元の世界に帰してもらえるのだろうか、って。

僕は確かに地味で目立たない人間だったけど、勉強を頑張ってテストの順位が上がれば母さんは仕事から帰ってきてから僕の好物を作ってくれたし、兄貴だって褒めてくれた。父さんは毎晩帰りが遅かったからあまり顔を合わせていなかったけれど、そんな時間まで働いてくれたからこそ、僕は今まで恵まれた生活を送っていたんだとわかっている。

お互いに何か特別なことを言ったことなんてなくても、僕がああ家族の一員だったことを疑ったことは一度もない。なのにもう二度と会えないなんて。鼻の奥がツンとして涙が込み上げてきて、僕は乱暴に顔を擦った。

「……う、ぐ……つぶ」

こめかみがズキズキして喉の奥が痛くて、強く目をつぶっても涙が溢れてきてしまう。いい年をして人前で泣くなんて恥ずかしいと思うのにどうしても止められない。その時、ふと傍に人の気配

がして誰かの腕が肩に回された。

「す、すみま、せん」

ぎゅつと肩を抱いてくれたサイドさんの服を握りしめて歯を食いしばる。涙を止めたくて息を詰めてもどうにもならない。するとサイドさんが僕の身体を持ち上げてしっかりと抱きしめてくれた。

同時にアドリーの声が聞こえてくる。その声は先程までの淡々とした調子とは違い、ほんの少し震えているように聞こえた。

「……神子よ。私にとって、神子をお迎えすることは長年の悲願でありました。また、神子さえ得ることができれば、当然我々はその恵みを受けることができるのだとも思っております。だが神子の方にも失い難き人生があったのだということを、恥ずかしながら今初めて思い知らせました」その言葉に驚き、思わず彼を見る。するとアドリーは両方の拳を床につき深々と頭を下げて言った。「こちらの勝手ばかりを押し付けて申し訳ない、神子よ。だが我が国には、この世界には、どうしても貴方が必要なのです。どうか、どうか貴方の恵みの力を我らにお与えください」

さつきまでずっと無表情だったアドリーの目が苦しそうに歪んでいて、僕は涙でぼやける目を瞬いた。アドリーは息を短く吸うと、先程とは打って変わった真摯な声で僕に言う。

「現在この大陸のほとんどが砂漠に覆われております。北のエルミラン山脈から湧く地下水こそ我々に残された唯一の生命線なのです」

アドリーがそう説明してくれる。

「しかしそのエルミランに降る雨は年々減り、このままではいずれ各地に点在するオアシスは枯れ、ほどなく国の中心部に流れる地下水路も干上がるでしょう。そうなる前にどうか慈雨の恩寵をお与えいただきたい。それができるのは神子である貴方だけなのです」

そう言うアドリーの目は怖いほど切実だった。藁にもすがる思い、というのはこういうのを言うのだろう。

ようやく上辺だけではない、彼の本当の気持ちを知れたような気がした。震える息を吐き、もう一度考える。

こうしてこの世界に来てしまった以上、もう僕が帰ることはできないのだろう。そして彼らが僕を大事にしてくれるのは、僕が雨を降らせることができる唯一の人間だから、ただそれだけなのも仕方のないことだ。それでも、とサイドさんの顔を見る。それでも、僕がこの世界でできることがあるのなら……

僕は頭を振って、まだ上手く声が出てこない喉を叱咤して答えた。

「……事情は大体わかりました。僕も、できるだけのことはお手伝いしたいと思います。……すみません、今言えるのはそれだけです」

「感謝申し上げます、神子よ」

そう言うアドリーは深々と頭を下げ、なぜかサイドさんの方を見た。サイドさんはアドリーが言わんとしていることをわかつているようで、軽く頷くと彼に言った。

「神子殿への給仕は私でしょう。急ぎアジャール山の様子を見てきた方がいい」

「はい。神子よ、申し訳ないが御前を失礼いたします」

アドリーはそう言って慌ただしく部屋を出て行った。

「あの、アジャール山って……?」

僕がサイドさんを見上げて尋ねると、サイドさんは小さく頷いた。

「今、話に出ていたエルミラン山脈への入り口となる山の名だ。この神殿のちょうど北の正面から見ることができ」

「そうなんです……」

まだまだ知らないことばかりだ。そう思い視線を戻すと、まだ自分がサイドさんの膝に座ったままであることに気がついた。

「うわっ！ すみません、僕……っ」

「気にするな」

サイドさんはその言葉通り気にした様子は見せず、胡坐をかいた足の片方に僕を乗せ、ウルドに指示していくつか食べ物を持ってこさせた。

「少しでも腹に入れた方がいい。これならどうだ?」

そう言う差し出されたスプーンの器を受け取ろうとしたけれど、いつになく取り乱したせいか指先が震えてしまう。するとサイドさんは僕の手ごと一緒に器を持って唇にあてがってくれた。

完全に甘やかされているな……恥ずかしい。

けれどサイドさんの腕に囲われているとなぜかとても安心できる。ありがたいことに彼は僕が

膝に座ったままでも気にせず、途中で食べ物を断つても「無理はしなくていい」と言つてウルドにお茶を頼んでくれた。

この世界では皆よくお茶を飲むらしい。食事中もウルドたちが銀の大きなポットに茶葉とたつぷりの熱い湯を注いでアドリーやサイドさんに渡していた。

食事が終わつてもサイドさんは僕を胸にもたれさせて静かに座っている。目の前を召使いの人たちが足音もたてずに静かに動き回つてクッションを整えたりお皿を下げたりしているのを、温かいお茶を手にとってぼんやりと眺めた。

サイドさんは「人に仕えられることに慣れた方がいい」と言うけれど、両親が共働きだったせいもあつてできることは自分でやるのが当たり前だったし、なんでも自分でやった方が母も喜んでくれた。——皆、今頃どうしているだろう。また家族のことばかり思い出してしまいそうになつて僕はぐいと顔を手の甲で拭い、サイドさんを見上げた。

「さつき、そのアジャール山は神殿から見えるつて言つてましたよね。僕も見られますか？」

「ああ、問題ない」

そう言つてサイドさんは僕の手から空の茶碗を取り、ウルドを呼んだ。

「神子殿の履物を」

すかさずウルドがサンダルのような靴を床に揃えてくれる。僕が手を伸ばそうとすると、サイドさんがそれより先に僕をひよいとクッションに座らせ、僕のかかともを持ち上げた。

「えっ!？」

慌てる僕を気にもせず、サイドさんはそのまま僕にサンダルを履かせてくれる。

その端正な横顔にまた心臓が跳ねた。僕が神子だから特別扱いしているのか元々そういう風習なのか、この人のすることはいちいち心臓に悪い。その時、ふと朝彼から聞いた言葉を思い出した。

「あの、サイドさんが最初に言つてた『アル・ハダール第一の槍』つていうのは……」  
するとサイドさんは僕の足を床に置いて顔を上げた。

「私はハリファ・カハルよりアル・ハダール第三騎兵団の団長職を拝命している。第一と第二の長は剣を使うが、私が得意とするのは鋼鉄の大槍だ。だから帝国第一の槍と呼ばれている」

凄い。騎兵団の団長で、鋼鉄の大槍を使っているなんてかつこよすぎじゃないか!? マンガや小説が大好きなおタクのサガで、思わずさつきまでの悲壮な気分が吹っ飛んでしまう。

しかしなんとなくそうだと思つていたけど、やはりサイドさんは偉い人だった。僕が敬語で話していても、サイドさんに対してだけは誰も咎めない。そんな凄い人にサンダルを履かせてもらつたり、風呂場でもあんなことまでさせてしまつたり……

「す……すみません……」

思わず謝つてしまった。するとサイドさんがいぶかしげに僕を見る。

「肩書はどうであれ、今は貴方を守ることが我が務めだ。どうかいつでも、どんなことでも頼つてほしい、神子よ」

とんでもない美形がもの凄くかっこいいことを言っている……。相手が僕なのももつたないぐら이다。また真っ赤になつてしまつていそうな顔をごまかしたくて僕はサイドさんに言った。

「あの、できたら名前で呼んでもらえませんか？ 僕は春瀬権……ええと、カイという名前です。あとできたらもう少し普通に……本当に僕、ただの平民なので、あまり畏まられると、その」

するとサイドさんが珍しく目を丸くする。そしてふっと笑って言った。

「わかった。これからはそうしよう、カイ殿」

「いや、呼び捨てでいいです！ 殿とかいいので！」

慌てて手を振る僕にサイドさんがまた笑った。

「ならばカイも俺にそう畏まらなくていい」

い、今俺って言ったよね!? 今までは私だったのに！ サイドさん、普段は自分のこと俺って

言うのか……意外だけどそのギャップがカッコいい……

そんなことをぼーっと考えていると、サイドさんは僕の手を取って立ち上がった。

「ではカイ、アジャール山が見えるところに案内しよう」

「あ、ありがとうございます」

するとすかさずウルドが近づいてきた。

「外はすでに日差しが強うございますので」

そう言って頭を下げたウルドから畳んだ布らしき物を受け取ると、サイドさんは僕の手を引いて歩き出した。そして彼が扉を開けようとするのを見て、今朝そこで見た黒い鎧姿の男のことを思い出す。思わずサイドさんの手をぎゅっと握りしめると、彼が驚いたように振り向いた。

「どうした？ カイ」

「あ、いえ……」

あの男が誰なのかサイドさんに聞けばいいのに、僕を見下ろした冷やかな黒い目や獐犛な気配を思い浮かべただけでなぜか喉が詰まって声が出なくなる。そうこうするうちにサイドさんは扉を開け、僕の手を引いた。恐る恐る部屋から出てみると、扉の外には誰もいなかった。

部屋の外には長い石造りの廊下がずっと向こうまで続いていた。

「ダーヒル神殿は東西に長い形をしていて、中央にカイが最初にいた儀式の間がある。アジャール山へはその儀式の間から北へ続く通路を通って行くことができる」

サイドさんについて廊下の端まで行き、螺旋状の階段をひたすら上る。階段の先にあった扉のない狭い出入口から外に出た途端、強烈な日差しと熱に襲われて思わずたじろいだ。分厚い石造りの神殿の中ではそこまで暑さは感じなかったが、さすが砂漠の国だ。直射日光の威力は相当なもので目が眩む。するとサイドさんがウルドから受け取った布を広げて被せてくれた。

「あれがアジャール山だ」

そう言ってサイドさんが指差した先を見て思わず息を呑んだ。そこには切り立った巨大な岩が重なる崖を越えた先に、黒々と聳える山があった。その後ろにも高い山々が連なりその部分だけが砂漠の世界で寒々しく見える。

僕の様子を見ながらサイドさんが説明をしてくれた。

「この神殿はアジャール山を北に背負う形で建てられている。アジャール山に連なるエルミラン山

脈に降る雨と山頂の雪解け水が地中に深く染み込んで、大陸全土に地下水として蓄えられる。私たちはそこから地下水路を経由して街へと水を引き込んでいる」

本で読んだことがあるな。地中の水を通しにくい粘土層まで達すると地下水が溜まる、と書いてあった。そもそもあそこに雨が降らなかつたら地下水は溜まらないまま干からびていくということだ。

「あの、それでさっきアジャール山に雨の兆候が見えたっていうのは……あれですか……？」

そう言って僕が指差した先には、山頂に重苦しく垂れこめた真つ黒な雲があった。……なんとうか、恵みの雨をもたらすというより何か悪いものが降ってきてきそうな禍々しさだ。

サイドさんも厳しい顔をして山の上の雲を見上げている。

「……あんまりいい雲には見えないですけど……」

「……そうだな」

やっぱりそうなんだ。え、でも朝食の時のアドリーはちよつと嬉しそうに報告してくれていなかった？ そう聞いてみると、サイドさんも眉を擡めたまま頷いた。

「恐らく、最初にアドリーが見た時とは様子が変わったのだと思う」

朝はいい兆候が見えていたのに悪化したということか。それは僕が何かしでかしたせいなんだろうか。そう考えるとサーツと血の気が引いていく。すると肩に大きな手が乗せられた。

「考えても詮なきことだ。儀式の日まで心安くあれ、カイ」

そう言ったサイドさんは元の穏やかな顔に戻っていてホツとした。

サイドさんはカハル陛下や神殿長、アドリーに対してはいつもキリリと唇を引き結んでいて言葉数もかなり少ない。けれど僕が不安になった時はいつも少しだけ笑みを向けてくれる。それがとても嬉しい。

「あの、サイドさんは僕がやる最初の儀式の内容を知ってるんですか？」

「……ああ、少しだけだが」

珍しく歯切れの悪い口調でサイドさんが頷いた。な、なんか不安になってくるんだけど……

目に入った雲の不穏さと相まってどんどん不安が増して、手が冷えていくのを感じる。するとそんな僕を見たサイドさんは踵を返した。

「顔色が悪い、一度部屋へ戻ろう。カイさえよければ後で神殿長殿が話をしたいそうさだ」

そう言われて急にどつと疲れが押し寄せてくる。次々にいろんなことが起きて頭がくらくらするし、この強い日差しと太陽の熱にも慣れるまで大変そうさだ。

部屋に戻った僕は相当顔色が悪かったようで、サイドさんにしばらく休むように言われてしまった。彼はウルドに水を持ってこさせ、僕の上着を取って身軽にしてから寝台に寝かせてくれた。昼が近づくとつれ、馴染みのない異国の香りと部屋に籠もり始めた熱気が鼻孔に絡みついてくるようだ。軽く頷いて出て行くこうとする彼をつい目で追っていると、すぐに気付いて近寄り、またかすかに笑ってくれた。

「眠れ、カイ。また迎えに来る」

サイドさんの声は穏やかだけれど言葉の音のひとつひとつがはっきりしていて力強い。だから

こんなにも安心できるのだろうか。彼の温かい手のひらを目蓋まぶたに感じながら僕は眠りに落ちた。

## 第二章 神子みこの受難

目を覚ますと辺りが真っ暗で、思わず飛び起きた。

しまった、神殿長が話を、と言っていたのに眠ってしまったようだ。

今は何時頃だろうと見回すと、部屋の中は静まり返っていて人の気配もない。少し肌寒さを感じて、掛けられていた薄布を体に巻きつけて窓から外を覗く。するとランプの灯った白い石造りの街並みとどこまでも広がる砂漠、そして数えきれないほどの星が瞬またたく夜空が見えた。約束をすっぱかしただろうことに胃が重くなりつつも、あまりに美しい星空に目を奪われる。本当にアラビアンナイトの世界だ。匂いも昼間とはどこか違っていて、肌に当たる空気はとても冷たい。

そういえば父親の本棚にあった昔のマンガに『砂漠は乾燥していて雲が少ないから、昼夜の気温差がとても激しい』と書いてあったな、とふと思いついた。

「……ほんとに、夢じゃないんだよな」

寒さに粟立つ腕を擦りながら、日本とは明らかに違う異国の景色を見て眩くらく。教室からいきなり飛ばされた異世界で神の遣いと呼ばれるなんて、夢でなければ完全にマンガの世界だ。

……だめだ。やっぱり僕が雨を呼ぶなんてとてもできるとは思えない。けれどこの世界の人たちは皆、僕が《慈雨じうの神子みこ》だと本当に信じているようだった。

「山の上に雲がかかったのが証拠だと言ってたけど……」

神子みこが力を示すと、アジャール山に恵みの前兆が表れるのだとアドリーが言っていた。そしてその前兆は僕がこの世界に来てからすでに何度か目撃されているらしい。けれど僕には自分がそれを引き起こしている自覚はまったくない。

「何かの間違いだと思うんだけどなあ……」

そもそもここは本当にまったくの異世界なんだろうか。

この世界に住んでいる人たちは皆僕たち人間と全然変わらないし、この建物の建材も今朝食べた料理も僕がいた地球とそっくりだ。空の月が青いとか二つあるということもない。この世界ではどうやって生命が生まれてどう進化したのかは知らないが、何もかもが偶然地球とまったく同じになるなんてどう考えてもおかしい。

「もしかして昔のエジプトとかアラブとかそういう場所にタイムスリップしたのかな」

そう考える方がよっぽど自然に思える。でもそれなら『雨を降らせる力を持つ人間を召喚する』なんてことができるはずがない。

「同じ星座があったら間違いないタイムスリップ説でオーケーだと思うんだけど」  
窓から身を乗り出して空を見上げる。

けれど夜空に輝く星の数は現代日本とは比べ物にならないほど多く、火星や金星はおろか北極星だつてどれかわからなかった。